

1 研究主題

「探究心」が湧き立つ授業

2 研究主題について

(1) 研究総論との関連

研究総論に示される研究主題「ともに学び、学び抜く子供」とは、困難な課題に対してあきらめず向かい合い、試行錯誤しながら取り組んだり、協働して解決策を考えたりしてやり遂げようとする姿である。「ともに学び」の中では、予測困難で先行き不透明な社会において、課題を解決するためには、多様な他者と協働して乗り越えていくことが必要になると述べられている。また「学び抜く」の中では、課題に対して自分なり（自分たちなり）に考え、やり遂げた経験、つまり学び抜いた経験は次の学びへ向かう力や困難な課題にもチャレンジしていく力になると述べている。研究1年次は、研究総論に示される「ともに学び、学び抜く子供」に迫る「意欲」と「粘り強さ」の2つの非認知能力に着目し、総合においてはこれらを「探究心」として包括して整理し、実証を重ねた。その中で、子どもの意欲と粘り強さの様相に影響を及ぼす題材や教師の手立てについて一定の見地を得るに至った。子どもたちは探究のプロセスにおいてぶつかる困難な状況を解決するために、既有的知識や経験を総動員したり、目標に向かう現状を捉え直すために省察し、探究のある地点にまで遡って解決策を検討したりするといった学びの調整を繰り返すことで解決の方略を見出してきた。この結果として得られた達成感や充実感が次の学びに向かう意欲や粘り強さに結びつくと考えられた。

研究2年次の総論では、『「ともに学び、学び抜く子供」の姿を再検討し、めざす子供の姿を実現するための手立てを追究する』ことを研究重点としている。よって総合の研究2年次は、1年次に見られた子どもの姿に基づき、探究心を「すぐに答えが見つからない問題に直面しても、過去の経験を基盤とした見通しに基づき、仲間と協働しながら納得解・最適解とその先を探り続けようとする意志」と捉え直すとともに、意欲と粘り強さを働かせる子どもの姿を再考し、学びの発展（=子どもの探究心が湧き立つこと）につながる手立てについて実践、検証する。以上の経緯から、「探究心が湧き立つ授業」を昨年度に引き続き主題として設定した。

(2) 本校の総合で考える「ともに学び、学び抜く子ども」の姿について

探究心を持ち、経験や学びが課題解決につながり生かされる実感を通して、学ぶこと
のよさや意味・価値を見出す子ども

学習指導要領解説総合編では、総合の目標を「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方について考えていく」ための資質・能力を育成することとしている。また、奈須（2021）は「子どもたちが望む生活を主体的・協働的に創造しようとする中で、身近で切実な問題に出合い、その解決を模索する途上で学びを深め、物事の理や自らの生き方について洞察を深めていく」ことが探究であると述べている。以上の見地から、子どもが身近で切実な課題や問題の答えを仲間と協働して模索する過程において探究的な見方・考え方を働かせ、課題や問題、仲間と向き合うことを通して「自分には何がで



きるのか」と自己の洞察を深めていくことが総合の授業で目指す子どもの姿と考える。本校の総合では、図-1の探究のサイクルにおいて探究的な学びを実現する子どもの姿を整理し、サイクルに基づいて探究のプロセスにおける子どもの姿を具体化するとともに、身近で切実な問題の答えを自ら探究し続ける姿を目指し、その実現につながる教師の手立てを構想していく。

0

(3) 1年次研究から見出した「意欲」「粘り強さ」の姿について

1年次の研究では研究総論における「意欲」と「粘り強さ」を次のように定義づけ検証した。

意欲 …目の前の問題を何とかしたいと思う子どもの気持ち

粘り強さ…探究課題に対する思いの達成に向け、自己の学びを調整し続ける事

定義した子どもの姿を、探究サイクルを視点として単元計画で具体化し、授業で具現化することを試み、実際に表出した姿や発言・記述を見取った。その分析を通して、1年次に定義づけた総合における意欲と粘り強さを発揮した子どもの姿をより明確化するに至った。

a-1 題材との出会いから生じる意欲

→身近で切実な課題（＝1年間追究し続ける問い）を解決し、理想状況へと向かおうとする姿

a-2 子どもから表出する問いを見通した教師の手立てによって生じる意欲

→題材との距離が近く、日々目にして変化を実感する中で子どもが気づきを得たり思いや願いを持ったりするようように、教師の意図的な環境設定に由来して表れる姿。長期的な取組の中では、教師の想定を超えた方向へ意欲を広げていく姿も確認された

a-3 目の前の活動に向かう意欲

→目の前の活動そのものを目的とし、没頭する姿。一見すると子どもの活動が課題の解決に向かっていないように見えることもあった

b-1 理想状況へ向かう意欲そのものを持続させる粘り強さ

→すぐに答えが見つからなくても簡単にあきらめず、Aの方法でダメならBの方法を試そうとする等、試行錯誤するプロセスにおいて、これまでの学びを省察的に捉え手がかりを見出そうとしたり、未知の学びに必要感を感じて取り入れたりしながら課題に取り組み続ける姿。

b-2 探究のプロセスや結果を見直し、今後の展望を見出したり妥当性を問い直したりする粘り強さ

→納得解や最適解が見出された後にも「もっとよくしたい」「これで本当のいいのか」と思考し続ける姿

研究1年次は、教師が子どもにとって切実な課題を見出し設定することや子どもの問いの連続的な発展を見据えた単元を構想すること、探究の局面に応じた思考の拡散や収束を意識した授業を計画することを手立てとし、探究へ向かう意欲や粘り強さを働かせることを目指した。実践を通して、目標を共有して活動に向かう中でも意欲の様相が子どもによって異なることや、解決の方略を教師の想定を超えてさまざまな方向へ巡らせることも確認できた。a-2・3は、子どもたち自身が価値のある活動と考えてチャレンジしたものの、予想していたような結果に結び付かなかった事実から、取り組んだ活動の意味や価値を実感しながら「次はこうしたい」と思いをもつ姿となって現れた。子どもを教師が想定した段取りに乗せるのではなく、かといって子どもの発想であればなんでも許容するわけでもなく、教師がいくつかの可能性を考慮した上で子どもたちとともに望ましい方向へと学習を進めていく必要がある。そのための手立てとして、教師が子どもの実態からゴールを明確化し単元を精緻に構想していくこと、そして教師の目から子どもの失敗が見通せたとしても、あえて挑戦を受容する姿勢が重要となる。

粘り強さに関しては、研究1年次はすぐに答えの見えない問題に直面した際に、これまでの学びを振り返ったり、今足りていないと思える学びを必要としたりするといった「自己の学びを調整し続ける姿」と仮定した。b-1については、これまで成功体験に基づいて、粘り強く解

決に向けた方略を見出そうとする姿として現れた。「この問題は本当に自分たちに解決できるのか」「自分たちは今目標達成に向けたプロセスのどの地点にいるのか」というように省察的に現状を捉え直し、新たに見通しを立てていく中で問題解決の糸口をつかもうとする姿が見られた。b-2については、追究した問いに対する1つの答えを導き出した際、達成感や充実感を得つつも、まだ解決しきっていない問題に目を向けたり「なんとなくモヤモヤする」と感じたりすることをきっかけとして、改めて望ましい未来を見通したり、過去に乗り越えた問題を振り返ったりするというように課題解決における自分たちの現状を捉え直す姿として現れた。このように思考する子どもの考えを共有する機会を適切に設けることが、解決が容易でない問題の本質への気づきと自分達なりの解決策を探り続ける姿につながる一助となると考えた。以上の子どもの姿が見られたことから、意欲と粘り強さをもつ子どもの姿について、研究2年次では次のように捉え直した。

意欲 …目の前で起きている身近で切実な課題から見出した問いを解決し、理想状況に向けて見通しをもって探究し続けようとする姿

粘り強さ…探究のプロセスや結果を省察し、望ましい状況について再考したり、これまでの活動の妥当性を問い直そうとしたりしながら課題解決への意志を持ち続ける姿

この「意欲」と「粘り強さ」が探究的な学びの中で十分に発揮されるように構成された授業を「探究心が湧き立つ授業」とし、これらに働きかける授業の手立てを構想する。

3 研究内容

(1) 本校の総合の「探究心」が湧き立つ授業づくりについて

田村(2021)は「子どもにとって身に迫った切実な課題」を設定することの重要性を述べている。子どもにとって自分事となる問いでこそ探究の意欲をもつことにつながるであろう。さらに、子どもの意欲の様相には、探究し続けられる「魅力的な題材(学びの深まりや広がりがある、追究する価値のある問い)」との出会いや「題材を魅力的に見せる教師の手立て(子どもと題材の出合いの演出や問いの連続的な発展を見据えた単元構想)」が影響を及ぼすと考える。魅力的な題材とは、子どもにとって身に迫った切実な、手に届く課題を内包し、子ども自身で課題解決を通した理想状況(ゴール)が見出せることや、目標達成のアプローチが一つでなく解決に向けた様々な方略が考えられ、さらに子ども自身の気付きによって学びに深まりや広がり生まれるものである。子どもの興味関心と学校や地域の実態により選出される題材は異なると言えるが、教師が1年間の子どもの問いや活動の連続的な発展が見通せることが選出の要となる。子どもの問いと活動の発展は、課題の過去や未来の姿といった「時間軸」友達や専門家といった異なる立場からの「イメージ(課題の捉え)」他の地域ではどうかという「空間軸」を視点として見通し、さらに子どもの発達段階や興味関心から具体的な体験活動を取り入れていくことで生まれると考える。また、子どもが意欲的に探究し続けるには、題材を通して子どもが積み重ねる体験を見通し、想定される学びの場面を探究のサイクルを視点としながら教師が具体的に構想することが重要となる。そのため本校生活科教科理論部で述べる、単元にかかわる「人」「物」「場所」「時間」を明確にして計画に位置付けることで、子どもがどのような場面でのどのような問いを見出すかを見通し、適切な学習環境を設定していくことも重視する。題材を魅力的に見せる教師の手立ては以下のように設定する。

- ・子どもの意欲の波と多様な探究の様相を見通した「単元計画とカリキュラム・マネジメント」
- ・子どもが違和感・必要感・矛盾を感じることを通して問いを顕在化させていく「意図的な場の設定」
- ・子どもの新鮮な気づきや問いに応える「弾力的な総合の時間の設定」

子どもの意欲の波や探究の様相を単元構想時に教科等との学びとのつながりをもとに想定し、

解決の方略を拡大させていく場面や目標に向かい思考を収束させていくといった子どもの思考に合わせた授業の展開を構想する。1年次の課題としても挙げた教師の想定を上回る子どもの問いの発展がみられる点については、日々の活動の様子や振り返りから子どもの探究の様相を把握し、理想状況へ到達する道筋を教師が適切に方向づけていくことで、探究の深まりや広がりにつなげていく。教師による意図的な場の設定とは、子どもの問いの顕在化をねらい「違和感」「必要感」「矛盾」が想起されるように、子どもの既有的認識との「ずれ」や「隔たり」、対象への「憧れ」や「可能性」を感じさせたり理想と現実を対比したりする場面を設定することである。題材に関する子どもの既知を把握し、それらを揺さぶる教師の問いや教材提示、一度立ち止まって考える省察場面の設定を手立てとする。また、題材の日々の変化から得られる子どもの気づきや問いには、弾力的に授業時数を運用することにより、それらの鮮度が高いうちに教師が応えていくことも、長期的な意欲の高まりに結びつくと考えられる。

(2) 振り返りシートの活用について

総合では、過去の学びや経験に基づいて理想状況に向けた課題解決の方略を見出していく。Katz(2021)らは「過去と現在からの多様な力が、瞬間的にも長期的にも実行機能に影響を与え、将来のアウトカムを予測する」と述べている。実行機能とは目標を達成する能力の1つであり、無藤(2022)は「目標を達成するために、自分の行いを抑えたり、切り替えたりする知的な能力が思考および情動(感情)システムに影響を与えること」と示している。探究のプロセスにおいて困難な場面に直面した子どもが目標達成をあきらめそうになっても、自らの感情をコントロールして目標を達成しようという意欲を持ち続けたり、粘り強く状況や方略を捉え直そうしたりする際には、学びの積み上げや具体的な経験が子どもの中で想起され、課題解決へつなげる展開となるよう手立てを講じることが重要となる。振り返りシートの積み重ねを子どもが自己の学びを省察的に捉える一助として活用しながら、学びの発展へと結び付く教師の手立てを構想する視点として活用していく。

研究1年次は「めざすゴールに自分たちがどれだけ近づくことができたのか」という視点に基づく振り返りシートの継続的な活用を、子どもの姿を見取る手立てとして活用してきた。その中では ①探究のプロセスを振り返り、目標への達成度の自己評価する記述 ②課題に対する新たな問いを見出す記述 ③授業で言えなかったことや友達の考えに対する自分の考えを述べる記述 ④活動の楽しさや行き詰まりについて述べる記述 が見られた。さらに教師が意図せずに ⑤自分の変容を自覚した記述 をする子どももいた。視点を明確にして振り返りシートを活用していく中で、目標に向かう自分たちの現状を捉え直し、何をすべきかを子どもたち自身で見出す場面が生まれた。一方で、学習の進捗状況において教師が求める記述も異なるため、プロセスに合わせた視点も必要となると考えられた。子どもが探究の局面において自己の学びを省察的に捉えられるよう、自己の学びを遡ることに加え、共に探究する仲間の意見を共有する機会を設定し、自分とは異なる考えとの出会いからの学びの深まりや広がりも目指していく。

〈引用文献・参考文献〉

- ・文部科学省 小学校学習指導要領(平成二十九年告示)解説 総合的な学習の時間編 2017
- ・国立教育政策研究所 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 総合的な学習の時間 2020
- ・文部科学省 「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」 2021
- ・山梨大学教育学部附属小学校 令和3年度研究紀要「学びをつなぐ子供(三年次)」2021
- ・ネットワーク編集委員会「探究する教室(授業づくりネットワークNo.39)」学事出版 2021
- ・小塩真司「非認知能力 概念・測定と教育の可能性」北大路書房 2021 P225～P238
- ・市川力 井庭崇「ジェネレーター 学びと活動の生成」学事出版 2022
- ・無藤隆「幼児教育の基盤としての学びから小学校を見通す：非認知能力とメタ認知を中心に」山梨大学附属幼稚園 2022年度公開研究会講演資料 2022